様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：４４２０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６７５５

研究課題名（和文）サルデーニャ語における語順と情報構造の通時的研究

研究課題名（英文）A diachronic study of word order and information structure in Sardinian

研究代表者
金澤　雄介（Kanazawa, Yusuke）

滋賀短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：７０７１３２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古サルデーニャ語におけるクリティックの重複と前置詞付き直接目的語が、目的語の意味的特徴、語順、情報構造とどのような相関があるかを考察した。クリティックの重複については、一致の標識として完全に文法化しているのではなく、談話的な機能を保持していると結論付けた。またサルデーニャ語の歴史におけるクリティックの重複の消失は語順の通時的変化と相関が見られることを指摘した。前置詞付き直接目的語については、以下の2点を明らかにした：(1)人間を表す名詞では、それがトピックであるか否かに関わらず、前置詞は義務的に現れる。(2)目的語がトピック要素であれば、意味的特徴に関わりなく、前置詞をともなう。

研究成果の概要（英文）：In this study I examined how clitic doubling and differential object marking "a(d)" in Old Sardinian correlated with semantic property of objects, word order and information structure. As for clitic doubling, I concluded that it was not grammaticalized completely as an agreement marker, but it preserved some discourse functions. Furthermore, I pointed out that the loss of clitic doubling in the history of Sardinian had correlation with word order change. As for differential object marking, I suggested the following conditions of its occurrence;(1)if the object denotes a definite human being, DOM is obligatorily required, regardless of whether or not it is the topic. (2) if the object is the topic, DOM is required, regardless of its semantic properties.

研究分野：言語学

キーワード：サルデーニャ語　ロマンス諸語　歴史言語学　文献学　クリティック　情報構造　スペイン語　ルーマニア語

１．研究開始当初の背景

(1) サルデーニャ語は、イタリアのサルデーニャ島で話されるロマンス諸語の 1 つである。サルデーニャ語は他のロマンス諸語と比較して、その共通の祖先であるラテン語の特徴をよく保存している。ゆえにサルデーニャ語の歴史についての研究は、他のロマンス諸語の記録以前の言語状態、あるいはロマンス諸語とラテン語の間に想定された言語である俗ラテン語の実態を知るという意味でも、極めて重要な位置を占めるといえる。しかしながらサルデーニャ語の歴史については、まだ解明すべき点が多々残されており、他のロマンス諸語の研究に資する成果を得るにいたっていない。このような現状のもと、申請者はサルデーニャ語の音韻論、名詞および動詞形態論の通時的変化についての研究を推進してきた。動詞形態論についての研究は、金澤雄介 (2011)『サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究』として出版した。その後、形態論の研究成果を踏まえ、クリティックの出現位置を中心とした、サルデーニャ語における語順の変化について、形態統語論的観点からの研究を推進した。

(2) クリティックの出現位置をはじめとする、形態統語論的研究を進めるうちに、古サルデーニャ語には左方／右方移動構文や、VSO / VOS など様々なタイプの語順が確認された。これらの語順には現代サルデーニャ語では許容されないものもある。このような語順、および現代サルデーニャ語にいたるまでの変化について妥当な説明を与えるためには、統語論的なアプローチだけではなく、情報構造を主軸とした語用論的なアプローチが必要である。しかしながら、特に古サルデーニャ語における語順に情報構造が与える影響については、まだ体系的な説明は与えられていない。

２．研究の目的

本研究では、古サルデーニャ語（11～15 世紀）から現代サルデーニャ語にいたるまでの語順と情報構造の通時的変化について考察をおこなった。本研究課題の申請当時の目的は以下の通りである。

(1) 左方／右方移動構文と情報構造

サルデーニャ語では、文の左端に外置された構成素はトピックと解釈され、右端に外置された構成素は脱焦点要素と解釈される。しかしながら古サルデーニャ語文献では、校訂者による任意の句読法が採用されており、校訂版だけでは構成素が外置されているのか否かを判断するのは難しい。そこで本研究では、当該文の前後の文脈、あるいは実際の写本を観察することで、情報構造が左方／右方移動にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。また、現代サルデーニャ語では古サルデーニャ語と比較して、移動が頻繁に起こる。本研究では、文献の年代ごとにどのような語順が許容されるかということを分析し、左方／右方移動に関する制約が緩和される過程と、情報構造との関連について考察をおこなう。

(2) クリティックの重複と情報構造

古サルデーニャ語では、左方移動した目的語がクリティックによって繰り返されるという現象に加えて、移動していない目的語がクリティックによって重複されるという現象が見られる。かつては、クリティックの重複の有無は、有生性や定性など目的語の意味的特徴に依存するとされていたが、この見方では説明できない例も観察される。そこで本研究では、クリティックの重複は情報構造、つまり目的語のトピック性に依存しているという通言語的特徴を踏まえて、重複が起こるメカニズムについて、方言差（ログドーロ方言とカンピダーノ方言）を考慮に入れつつ明らかにする。

現代サルデーニャ語では、クリティックの重複は観察されない。本研究では、クリティックの重複が失われた歴史的過程について考察をおこなう。その方法としては、年代ごとに重複の例を、前後の文脈と関連付けて分析することに加えて、文法化の観点を導入する。具体的には、トピック性の標示という談話的な機能を持っていたクリティックが、単なる一致の機能を持つ要素へと変化し、最終的には消失するという過程を、文法化の結果として位置付けることで説明を試みる。

(3) 動詞第 1 位の構文と情報構造

古サルデーニャ語では動詞で始まる平叙文が多く見られる。このような語順は従来、動詞の CP への移動など、統語論的なアプローチによって説明されてきた。本研究では、動詞第 1 位の構文と情報構造の関連について、①文フォーカス、②主語のトピック／フォーカス性、③主語の省略の有無について考慮に入れつつ解明を試みる。また動詞第 1 位の構文は、等位接続詞 e(t) “and” によって導かれることが多い。e(t) の語用論的性質、そしてそれが情報構造に及ぼす影響についても考察を試みる。

(4) 疑問文と返答文におけるフォーカス

古サルデーニャ語文献には、会話文の実例が極めて少ないという難点があるが、疑問文とその返答文における語順は、情報構造の特質を知る上で重要な役割を担う。具体的には、wh および yes/no 疑問文と、その返答文の語順にフォーカスが及ぼす影響について、informational focus と contrastive focus の振る舞いの差異を中心に、考察を試みる。また現代サルデーニャ語では yes/no 疑問文の文頭にはクリティック a が現れることがある。a の出現が語順に与える影響を中心に、疑問文と返答文における語順の通時的変化つい

て、統一的な説明を提示する。

３．研究の方法

本研究では、サルデーニャ語における語順と情報構造の通時的変化について考察するにあたって、古サルデーニャ語の写本の画像と、申請者自身が作成した古サルデーニャ語文献のコーパスを活用した。本研究で主に扱った古サルデーニャ語文献は *Condaghe di San Pietro di Silki*（ログドーロ方言；12 世紀前半）である。この他にも、*Condaghe di San Nicola di Trullas*（ログドーロ方言；1130 年～13 世紀）、*Carte Volgari*（カンピダーノ方言；1070 年～1226 年）、*Statuti di Repubblica Sassarese*（ログドーロ方言；14 世紀）、*Carta de Logu*（カンピダーノ方言；14 世紀）、*Condaghe di San Pietro di Sorres*（ログドーロ方言；14 世紀）も参照した。

上記の文献を用いて、以下の方法で研究を実施した。

(1) クリティックの重複に関する分析

古サルデーニャ語におけるクリティックの重複の用例を収集し、分析をおこなった。重複が生じるときの目的語の意味的特徴、情報構造とのかかわり（その目的語が文のトピックであるか）について分析をおこなった。

また、現代サルデーニャ語にいたるまでにクリティックの重複が失われた過程について、文法化の観点からの説明と、基本語順の通時的変化との関連性からの説明を試みた。

(2) 前置詞付き直接目的語に関する分析

古サルデーニャ語における前置詞付き直接目的語 (differential object marking (DOM)) の用例を収集し、分析をおこなった。前置詞が付加されるときの目的語の意味的特徴、情報構造とのかかわり（その目的語が文のトピックであるか）について分析をおこなった。

前置詞付き直接目的語とクリティックの重複は、いずれも目的語の意味的特徴と情報構造に関わる現象であるが、その機能は同一ではない。プロミネンスや定性、その他の語用論的機能も考慮に入れつつ、2 つの文法現象の相関についても考察をおこなった。

(3) 他のロマンス諸語における、並行する現象の分析

本研究では、特にスペイン語とルーマニア語におけるクリティックの重複と前置詞付き直接目的語、そしてこれらが語順と情報構造とどのような相関があるかについて考察をおこなった。同系言語において生じた通時的変化の実例に、サルデーニャ語における当該の現象について解明する手がかりが存在する可能性があるからである。

(4) 類型論的アプローチ

先行研究が少ない言語の研究においては、系統の異なる言語における並行例に、問題の解明のヒントが見いだされることがある。例えばクリティックの重複と情報構造の関わりについては、Dalrymple and Nikolaeva (2011) “Objects and Information Structure” における諸言語の類例を参考にし、類型論的なアプローチをおこなった。

(5) 古サルデーニャ語関連資料の収集

29 年度の 3 月にカリアリ大学図書館に赴き、本研究に関連する論文のコピーを入手した。

４．研究成果

(1) クリティックの重複について

古サルデーニャ語におけるクリティックの重複に関する分析の結果、次の 3 点を明らかにした：①クリティックの重複は、特定の意味的特徴（有生性・定性）を持つ目的語における一致の標識としての機能を持つ。②二重目的語構文において、クリティックの重複は先行するほうの目的語、つまりよりトピック性の高い目的語に観察される。③②の分析を支持する根拠として、左方移動構文では、左方移動要素はクリティックによる繰り返しをともなうが、本来の統語的位置にある（非トピック要素である）目的語は、たとえ有生名詞など「トピックになりやすい」名詞であっても、重複を受けないことを挙げた。以上の考察から、クリティックの重複は一致の標識として完全に文法化しているのではなく、談話的な機能を保持していると結論づけた。

また、現代サルデーニャ語においてクリティックの重複が消失したことは、語順の通時的変化と関係が見受けられることを示した。つまり、クリティックの重複が観察される古サルデーニャ語では、統語論・語用論的に無標な語順として VSO (VOS) が許容される。一方、クリティックの重複が許容されない現代サルデーニャ語では無標な語順としての VSO や VOS は許容されない。またこのようなクリティックの重複と語順についての相関は、他のロマンス諸語にも観察されることを示した。具体的には、クリティックの重複が生じるスペイン語やルーマニア語では無標な語順として VSO (VOS) が許容される一方、クリティックの重複が観察されないイタリア語やスペイン語ではこのような語順は許容されないことを見た。

(2) 前置詞付き直接目的語について

古サルデーニャ語における前置詞付き直接目的語が現れる条件について、情報構造、ならびに情報構造と意味的特徴との関わりの観点から記述することを試みた。考察の結果、前置詞付き直接目的語は以下の条件下で現れることを指摘した。①人間を表す名詞では、トピックであるか否かに関わらず、前置詞は義務的に適用される。②その目的語がトピック性を持っていれば、意味的特徴に関わりなく前置詞は現れる。

また、古サルデーニャ語に見られる前置詞付き目的語の適用規則は類型論的に広く観察されることを示した。加えて、古サルデーニャ語のシステムは、「情報構造依存タイプ」から「意味的特徴依存タイプ」への文法化の中間段階に位置づけられることを示した。

(3) 総括

研究機関全体を通して、サルデーニャ語のクリティックの重複と前置詞付き直接目的語が、目的語の意味的特徴、語順、そして条項構造とどのような相関があるかを考察してきた。これらの研究成果は国内外の学術雑誌および学会で公表した。スペイン語やルーマニア語などにおけるこれらの現象には多くの研究がある一方、サルデーニャ語を対象とした研究は多くない。その意味で本研究は、ロマンス語学全体の枠組みにおいてこの 2 つの文法現象にまつわる諸問題について解明する基盤作りに寄与したといえる。

しかしながら本研究では、クリティックの重複と前置詞付き直接目的語の間にどのような相関があるのかを明らかにするまでには至らなかった。生成文法の観点や、類型論の観点も織り交ぜながら、この問題をロマンス諸語全体の枠組みから解明することが今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

① KANAZAWA Yusuke（印刷中）“Uno studio contrastivo del raddoppiamento clitico nel sardo e nello spagnolo dal punto di vista del grado diella grammaticalizzazione” in: *Comparatio delectat III.* Peter Lang.（査読あり）

② KANAZAWA Yusuke（印刷中）“A Typological Analysis of Differential Object Marking in Old Sardinian” in: *Aplicaciones de la lingüística de corpus al estudio de lenguas modernas.* Real Sociedad Menéndez Pelayo.（査読あり）

③金澤 雄介 2016.「古サルデーニャ語における Differential Object Marking－類型論と文法化の観点から－」『滋賀短期大学研究紀要』第 41 号　pp.129-142.（査読なし）
http://id.nii.ac.jp/1480/00000004/

④ KANAZAWA Yusuke 2015. “Il raddoppiamento clitico nel sardo antico” in: Pirvu, Elena (ed.) *La linguistica e la letteratura italiana in prospettiva sincronica e diacronica (Atti del VI Convegno internazionale di linguistica dell’Università di Craiova, 19-20 settembre 2014.)* pp.187-196.（査読なし）

〔学会発表〕（計　４　件）

①金澤 雄介 2018.「サルデーニャ語におけるクリティックの重複の消失　―語順の変化と関連づけて―」日本ロマンス語学会第 56 回大会　於京都大学

② KANAZAWA Yusuke 2016. “Studio contrastivo del raddoppiamento clitico nel sardo e spagnolo -dal punto di vista del grado della grammaticalizzazione-“ VIII Colloquio Internazionale “Linguistica contrastiva romanzo-tedesca e intraromanza” 於 Università di Innsbruck.（オーストリア）

③ KANAZAWA Yusuke 2016. “A Typological Analysis of Differential Object Marking in Old Sardinian” IV Congreso Internacional de Lingüística y Literatura. 於 Universidad de Cantabria.（スペイン）

④金澤 雄介 2016.「古サルデーニャ語におけるクリティックの重複について －語順との関連－」日本ロマンス語学会第 54 回大会 於九州大学

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

①平成 29 年度大津市立和邇図書館教育講座第１回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇「ことばと文化から見たイタリアの多様性」2017 年 8 月

②滋賀短期大学　すみれキャリア講座 2017「大人のイタリア語講座」2017 年 9 月

６．研究組織

(1)研究代表者

金澤　雄介　　（KANAZAWA, Yusuke）
滋賀短期大学・ビジネスコミュニケーション
学科・准教授

研究者番号：70713288

(2)**研究分担者**
(　　)

研究者番号：

(3)**研究協力者**
(　　)